

堂内の荘厳具としての幡の一考察（その一）

青海邦子

The Notion of “Ban” As Sacred Adornment (Part 1)

SEIKAI Kuniko

1. はじめに

仏教において、今も昔も仏像やお経（経論）が尊崇され、これらが重視されるのは当然と理解されるが、仏教伝来当初に仏像や経論の外に「仏具」として「幡」と「蓋」（てんがい天蓋）がともにもたらされたことはよく知られている。仏教での「幡と蓋」がいかなる役目を果たし、どういう意義をもっていたものであるかについて考察し、それらを調べるにあたり、多く出陳されていた今年度の正倉院展で調査を行った。

正倉院展は奈良帝室博物館で昭和21年に第一回が始まり、今年（2006年）で第58回の開催となる。本年度は、天平勝宝八歳（756）5月2日、聖武天皇が崩御され、その49日にお妃の光明皇后が天皇御遺愛の品々650点あまりを東大寺大仏に献納（正倉院宝物の成立）した年より数えて、1250年に当たる記念の開基である。聖武天皇にゆかりのある宝物が数多く出陳されている。また、大仏開眼会に際して献納された仏具数の中で用いられた荘厳具しうこんの孔雀文刺繍幡や聖武天皇一周忌齋会に齋場の東大寺境内に懸け並べられた道場幡の残欠の幡脚端飾の部分が院展初公開で展示された。幡は仏殿の内外を飾る仏事の荘厳具として、また延命（長命を願うしゆくめいぼた続命幡）や死者（死者の冥福を祈るめい か ぼん せんもうぼた命過幡（薦亡幡））の追善供養として作られた。

よって、寺の本堂内の幡について、奈良県御所市にある船宿寺と橋本院を調査、研究を行ったので報告する。

2. 調査結果と考察

2-1 日本の幡の変遷

幡は日本に仏教伝来とともにもたらされたと考えられている。日本最古の勅撰書である『日本書紀』によると、幡に関する初見は欽明天皇13年(552)の条に「冬10月。百濟聖明王、^{更名聖王}遣^{注1)}西部姫氏達率怒喇斯致契等一。献^{はなまがき}釋迦佛金銅像一軀。幡蓋若干經論若干卷一。」とあり、百濟の聖明王より金銅釈迦像や經論とともに幡蓋がもたらされたことが知らされている。幡蓋については、初期仏教經典では、仏に対する供養具として「華・香・伎楽・繪蓋・幢幡」(『大典量寿經下』)、莊嚴具として「繪綵宝幢・幡・蓋・名華」(『過去現在因果經一』)の記述がみられる。幡蓋は幡(梵語の^{パターカー}pataka)と蓋(chatra)の二具を指すが、密教では四角形の天蓋の四隅に幡を垂らす三昧耶天蓋がありこれは幡(はた)と蓋(かさ)を組み合わせた幡蓋と言う莊嚴具である。わが国の古典では「幡蓋」を熟語で使用することが多いが、天蓋(図1)と同義に使用することがある。

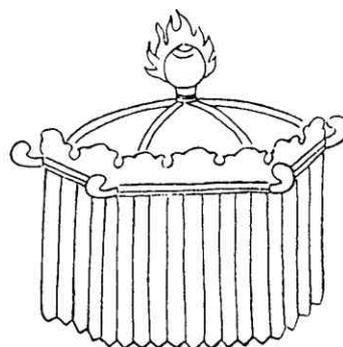


図1 天蓋

また、同書推古天皇31年(623年)の条には「31年秋7月。新羅遣^{注2)}大使奈末智洗爾一。任那遣^{注2)}達率奈末智一。並来朝。仍貢^{注2)}佛像一具。及金塔并舍利。且大灌幡一具。小幡十二條一。即佛像居^{注2)}於葛野秦寺一。以^{注2)}餘舍利。金塔。灌頂幡等一皆納^{注2)}于四天王寺一。」とあり、大観頂幡一具と小幡12条が新羅・任那よりもたらされ、四天王寺に納められたことがわかる。

さらに、持統天皇3年(689)の条には「正月壬戌。詔^{注3)}出雲國司一。上^{注3)}送^{注3)}遭^{注3)}值風浪一蕃人上。是日。賜^{注3)}越蝦夷沙門道信佛像一軀。灌頂幡。鍾鉢各一口。」とあり、幡は百濟・新羅・任那の朝鮮半島より仏像やお経(經論)などと共に伝来したことがうかがえられる。また、文物は、他の多くの宝物類と同様に中国から朝鮮半島を経由して我国へもたらされたものと推測される。

しかし、当初の幡は遺存していないので実態はつかめない。現在最古とされている法隆寺伝世品の幡について調べると、蜀江錦を用いた縁が一条

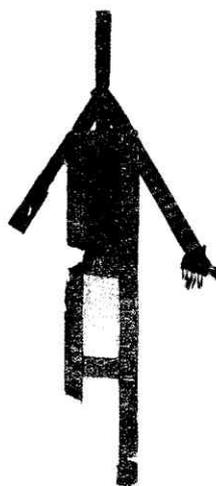


図2 蜀江錦綾幡
(法隆寺)

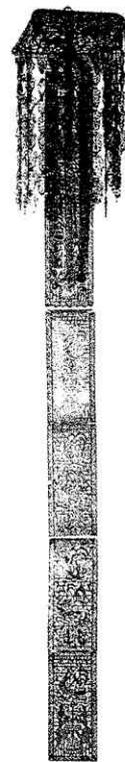
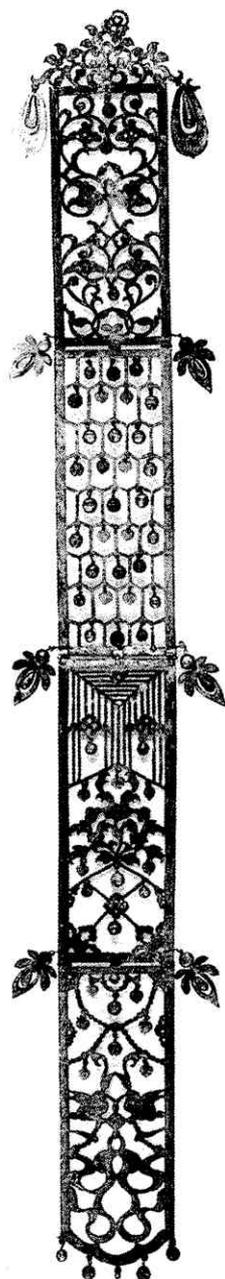


図3 金銅灌頂幡
法隆寺献納宝物

の蜀江錦綾幡（図2）、蜀江錦で仕立てた聖徳太子ゆかりの間道小幡（国指定重要文化財）、全長五メートルにおよぶ献納宝物の金銅灌頂幡（国宝、東京国立博物館）（図3）が名高く、正倉院にも聖武天皇一周忌法要が東大寺で営まれたとき使われた数百旒の錦の幡（図4）・羅の幡（図5）のほか、金銅幡四旒（図6）など多数が残っている。平安後期の遺品では岩手・中尊寺金色院の幡頭二枚と、迦陵頻伽文を表した幡身一坪の金銅幡がよく知られている。玉幡は広島・巖島神社の「平家納経」の安楽行品の見返しに描かれた絵から平安時代の姿をうかがい知ることができるが、当時の遺例や、金銅板製は残存しておらず、幡足などに玉を用いた室町時代時代以降のものがほとんどである。



2-2 幡の形状と各部の名称 と種類と材質

幡の形制は幡頭・幡身・幡足から成っており、あたかも人形（ひとがた）を擬して作られた

かのようにもみえる。幡頭は舌をそなえた三角状をした帯紐状の幡頭手を付ける。幡身の各坪は縦長で、坪堺によって各坪ごとに区切られており、坪の周りには縁をめぐらす。縁の各坪堺より紐状の幡手を付けるものがあり、二条縁では縁をめぐって坪堺との交点上に金銅丸金具を飾るものが多い。幡足は長い带状で各々少しずつずらせながら重ね合わせて垂下する。なお、幡足はおおむね五条か七条の奇数になるものが大部分である（図7）。

図4

錦幡…聖武天皇一周忌法会の道場荘厳用

図5

羅幡…聖武天皇一周忌法会の道場荘厳具

図6

金銅幡

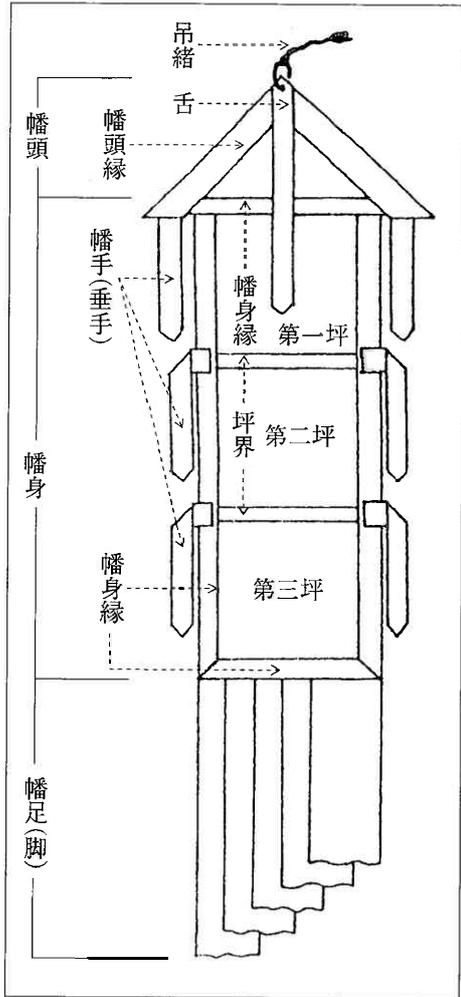


図7 幡の各部名称

また、幡身には仏、菩薩、明王、天王などの法尊を描いているものがあるが、仏像幡、種子幡、三昧耶幡、蓮華幡の区別がある。正倉院の彩絵仏像幡や、西域発見の彩画菩薩幡がそれに当たる。

材質は錦・綾・平縮羅などの裂地製や刺繍のものが大部分であったが、地に金銅板に透彫・線彫を施した金銅幡、各種の玉をつなぎ合わせた玉幡、総飾りを手足にする糸幡、板を芯とする板幡、略式の紙幡などがある。また色相による名称の付いた五色幡・八色幡・九色幡・雑色幡などの種類がある。用いる場所や堂舎によって呼称も変えることがあり、堂幡、庭幡、屋上幡、天蓋幡などの区別がある。用法によってみると、続命幡（寿命）、命過幡（^{めいかばん}薦亡幡）（命終の時に立てる幡のこと）、送葬幡（四本幡）、施餓餓幡などがある。

さらに中国の朝儀に用いた幡も、儀式とともに日本に伝わった。元日朝賀儀や即位儀の際に

大極殿の前に立てられた四神幡（四神旗とも）、即位儀の万歳幡、鷹像幡（^{たか}幢とも記される）、あるいは近年の儀に用いられる^{れいし}靈鷲形大綿幡、菊花章錦幡などはこの類である。

2-3 中国における幡の変遷

中国に於ける幡の様相を調べてみると、中国における年代の明確な幡の遺品には開元13年（725）の発願文を有した彩色平絹幡（図8）がある。この幡は平絹を方形に裁断したまま裂を縫い合わせたて繋ぎ、簡素な幡である。これより遡る完形遺品はみあたらないようである。しかし、壁画においては、間接的資料であるが、敦煌莫高窟の壁画で調べることが出来る。敦煌莫高窟は紀元4世紀より14・5世紀の長期にわたって造営され、壁画や塑像を有する石窟は500近くあるとされている。これらの窟の中の幡は5世紀末頃とされる北魏の「^{ぶつさんそん}仏三尊図」

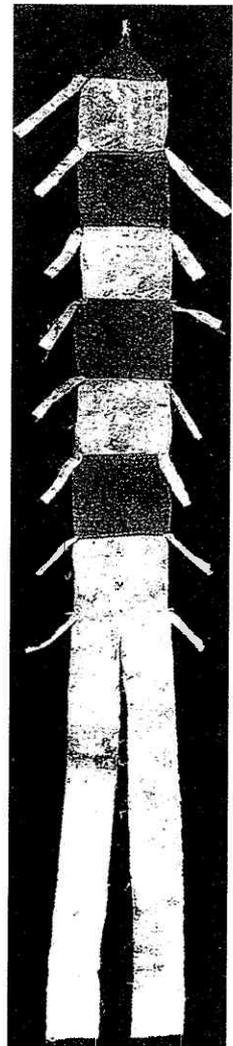


図8 彩色平絹幡・開元13年銘敦煌文物研究所



図9 沙弥守戒自殺因縁図（敦煌莫高窟・第257窟・南壁）

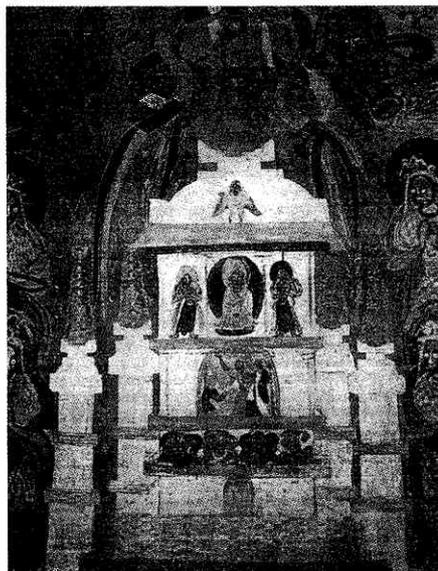


図10 金剛宝座塔（敦煌莫高窟・第42窟・西壁中央南側）

と「沙弥守戒自殺因縁図」（図9）にみられる。どちらも二流の幡が闕屋上の相輪に懸けられている。幡の形は細長い裂を単に合わせただけのようにみえる。坪は長い一坪のみである。北周（557～581）になると、これらも北魏の幡同様相輪に翻っているが、坪を四坪か五坪に区画するようになる（図10）。各坪はかなり縦長である。このように当初の幡は、闕や塔の相輪に懸けられていたことが知られる。隋代になると、縁に一条にした五坪の幡と、縁を二条に作った四坪の幡がいずれも天蓋に懸けられているのが敦煌莫高窟の「仏説法図」（図11）にみられる。初唐になると、幡頭は三角状で、下方の左右により紐状の幡頭手を付け、幡身各坪は正方形に近くなり、縁と坪界を一条にした正倉院幡を彷彿させる幡がみられる。盛唐になると、先述のごとく開元年銘の彩色平絹幡の遺存である。この幡は各坪形が初唐のそれより一層縦が短くなり、ほぼ正方形になるところが注目される。染は纈纈・蕩纈が用いたことがうかがえらる。幡頭・坪の形の変遷を我国の上代の幡に対応させることが出来る。

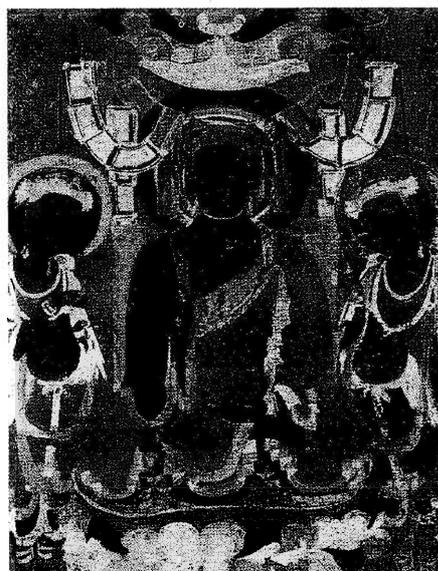


図11 仏説法図（敦煌莫高窟・第305窟・西壁北側）

2-4 幡の形状と仕立て・使用裂の変遷

幡は遺存している最古とされている法隆寺系幡からこれに続く正倉院、そして中世へと時代を経るにしたがって、幡はどのように推移していったのか、その変遷について調べる。

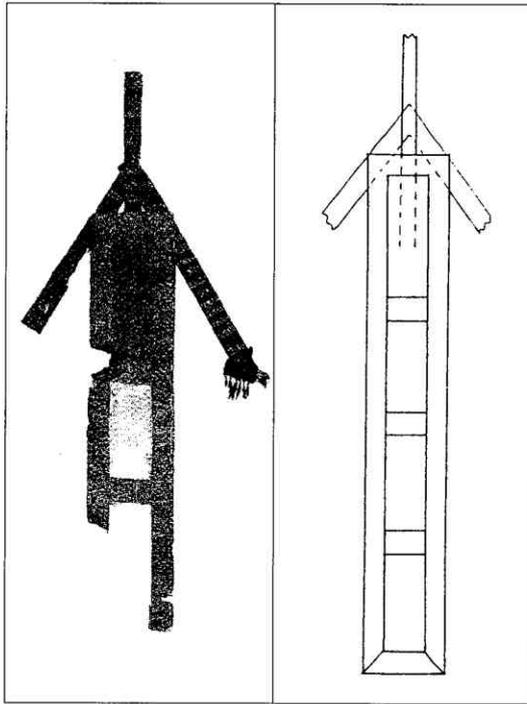


図12 蜀江錦綾幡…天武・持統朝(672~696)

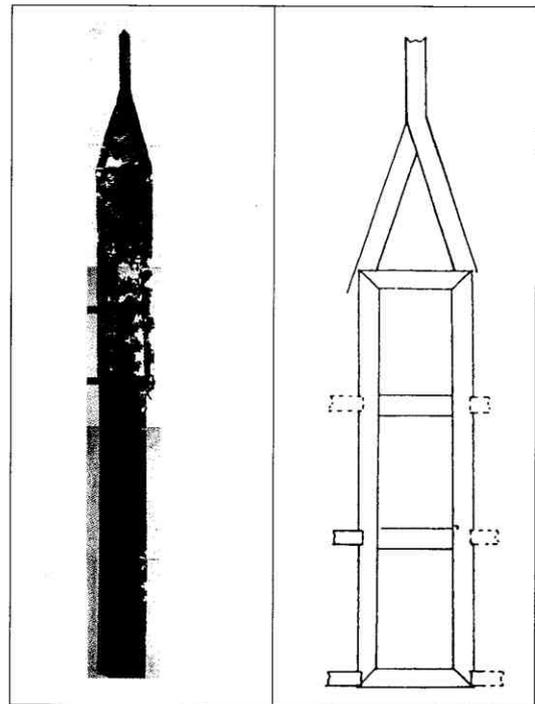


図13 平絹幡(戊子年銘)持統二年(688)

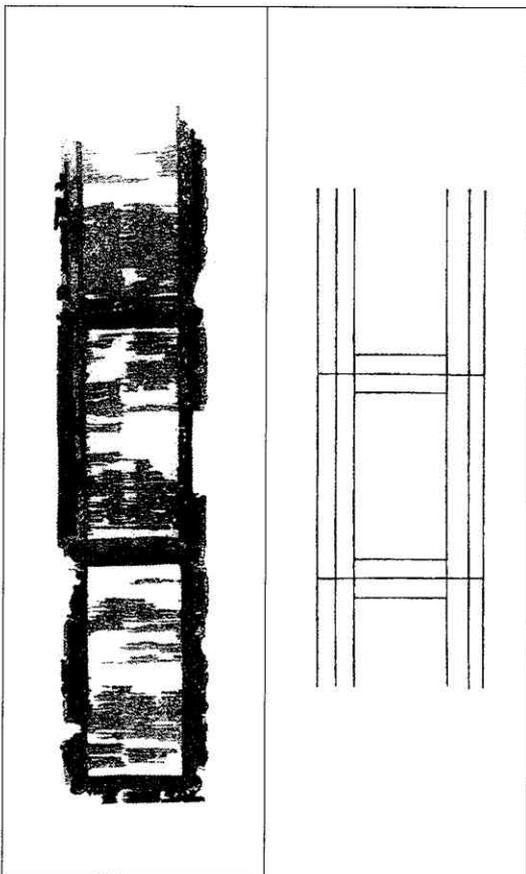


図14 広東綾幡残欠(和銅7年銘714)

天武・持統朝と比定される蜀江錦綾幡(図12)は幡頭部が帯紐状で、坪は非常に縦長(坪の縦は横の3.1倍前後)である。第一坪目に錦を裕で用い、第二坪目以下は綾の単で一枚通しで使っている。縁と坪界は共に一条で、錦を当てる。幡足は五条を少しずつずらせながら重ね合わせて垂下し、様々な色の綾などを用いるが、大部分欠失しており仕立ては判然としない。続いて持統朝とされる平絹幡(戊子年銘)(図13)ではすでに、紐状幡頭とそれらに囲まれた三角状の空間に当たる鏡面に別裂を当てた併用形式が認められる。この幡は命過幡であり、幡頭・幡身・幡足とも茶色味を帯びた黄地平絹で仕立てられる。各坪の長さは蜀江錦綾幡よりやや縮まるもののまだ縦長(坪の縦は横の1.6倍)である。縁と坪界はともに一条。幡足は五条で、少しずつずらせて垂らす。各条の仕立ては両側とも三つ折り縫いとするが、裂が片方の場合は縫わずにその

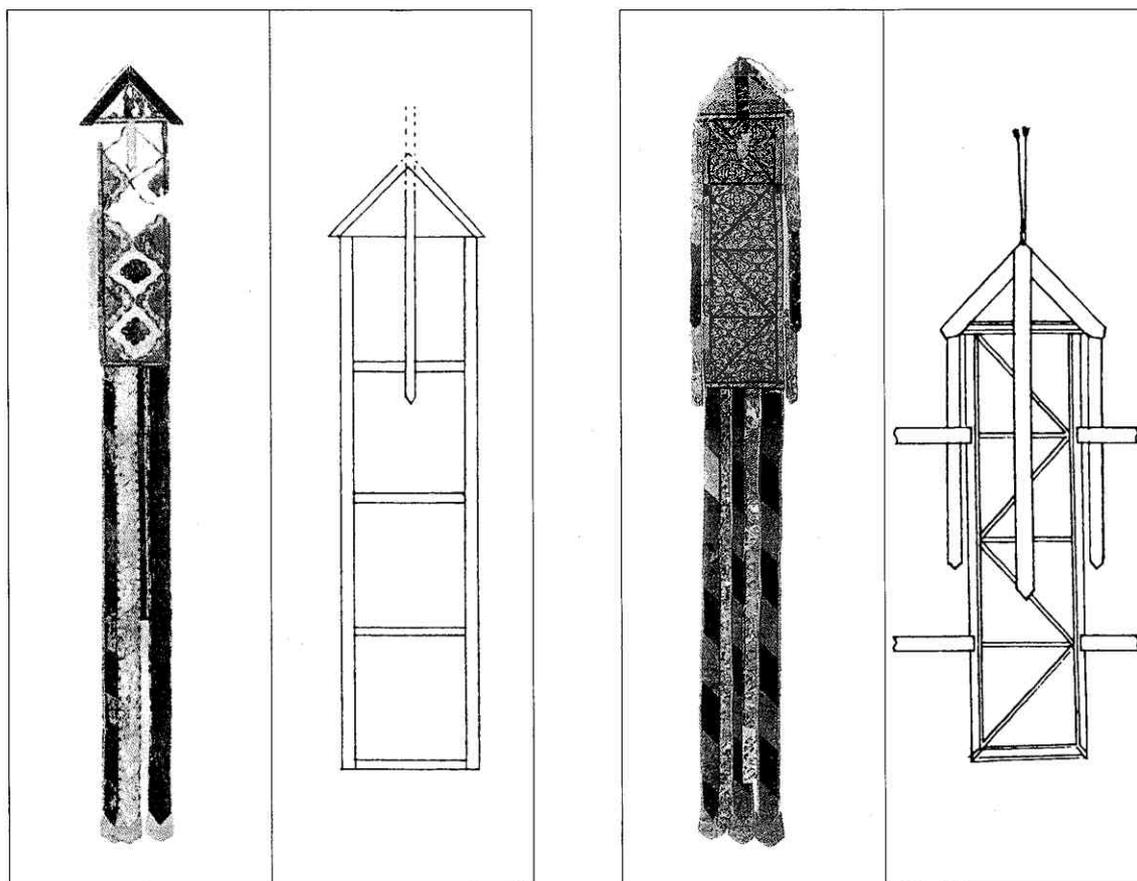


図15 縹縹羅袷幡 天平勝宝4年(752)

図16 錦斜継分袷幡 天平勝宝九歳(757)

ままとしている。引き続いて和銅七年銘の広東綾幡残欠(図14)であるが、この幡は幡頭部を欠失している。前掲の2つの幡にはみられなかった縁と坪堺は二条となり、種々の色と文様の綾が使われている。寺系幡の仕立てで特筆すべき点は、縫い目の細かさにある。仕立て方に付いて、針目は細かく、仕事ぶりには熟達した技がうかがえる。天平勝宝四年(752)の縹縹羅袷幡(図15)〈大仏開眼会用〉に於いては、幡頭部の坪はほぼ正方形に近づいてくる(坪の縦は横の1.09倍)。幡身の坪は平絹を袷とし、その両面に縹縹羅を当てた都合四枚重ねで、いずれも一枚裂を通して用いている。薄物の羅を通して下の平絹の色が浮かび上がって見える。幡足は欠失しており推定出来ない。

続いて天勝宝九歳(757)の道場幡(図16)〈聖武天王一周忌齋会用〉では随所に顕著な変化が認められる。まず、幡頭部は三角形で、これまでひと続きであった紐状幡頭の懸緒と舌が独立し、前者は縁の山形の頂に、後者は縁の内側より垂らすようになる。幡身部(ここでは法隆寺系幡との比較の上で重要な錦斜継分袷幡について)に於いては、これまで一枚続きであった坪裂が各坪ごと袷に作られるようになる。すなわち、各々の坪は二種類の錦を斜めに継ぎ分け、この継ぎ目と坪堺、さらに縁と坪との境目にも表裏両面とも平絹の細かい覆輪で被っている。縁は錦で、30種類ほどみられるとのことであり、上端と下端とでは裂の種類を変えている点に工夫の跡が窺われる。こうした装飾的な使用は幡足にあっ

でも発揮されている。幡足は五条を垂下し、各条とも正方形の裂をつなぎ連ねて縁を付ける。そのうえ、奇数条目と偶数条目の裂を交替している。すなわち、前者の条は二種の綾を繋ぎ合わせて纈纈・藤纈平絹を連ねて平絹の縁を付

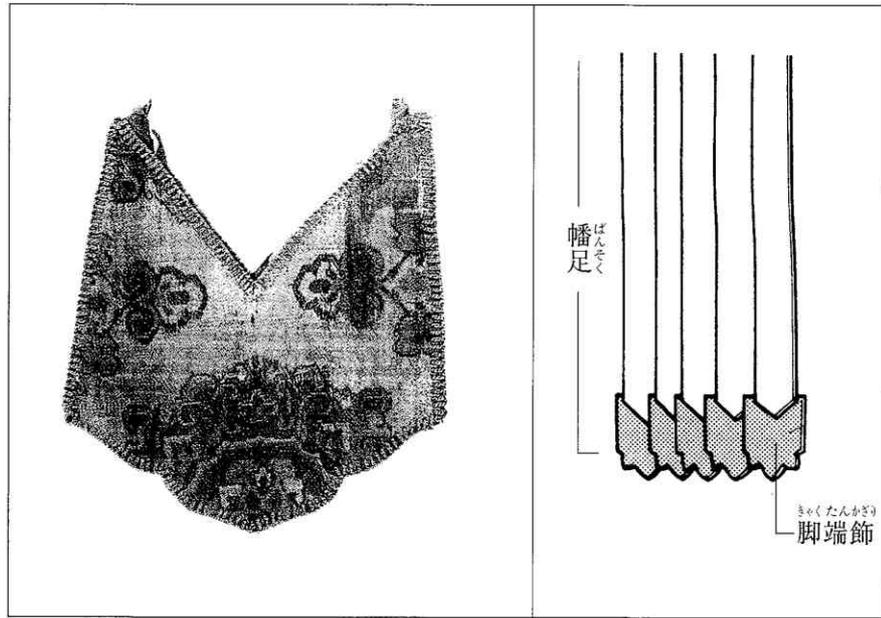


図17 幡脚端飾

ける。なお、各々の幡足下方には縁かがりのある手の込んだ主記の脚端飾を飾っている。

幡脚端飾は道場幡の垂脚の下端の部分である（図17）。脚端飾は垂脚の下橋を錦の花形の止め飾で両面から抑えられている。前述のべたように聖武天皇一周忌齋会に斎場東大寺境内に懸け並べた。脚端飾の付いた道場幡は幡の全長は約3m、そのうちの半分を越える約175cmは垂脚で、その幡は各役10cmと細長い。もともと脆弱な織物製であるうえに細長い。垂脚は構造上ちぎれやすい。脚端飾の織り方は綾組織緯飾模様の唐花文条が主流を占めて

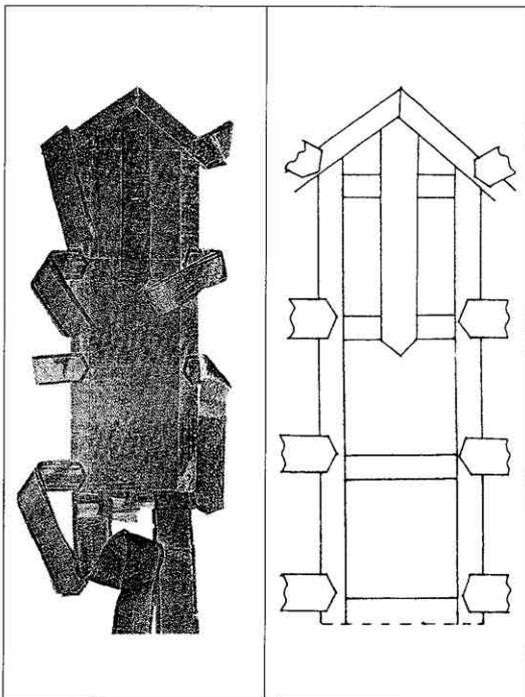


図18 平絹幡(長楽寺)12世紀後半

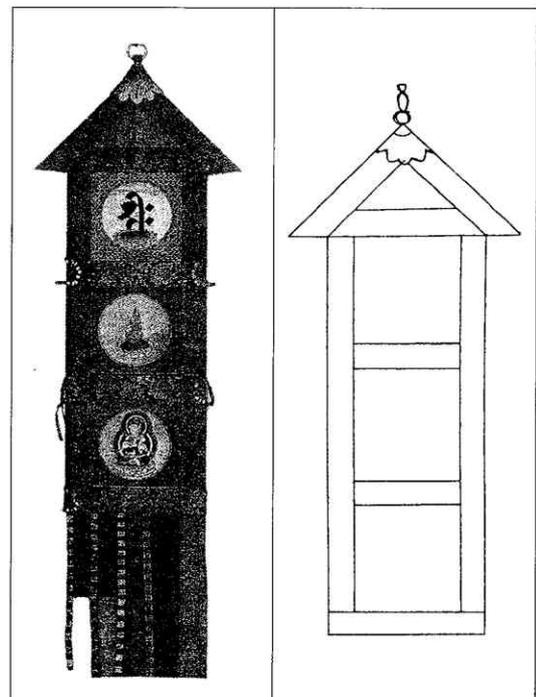


図19 刺繍三味耶幡(兵主大社)14世紀前半

いる。染めは纈纈・藤纈で染められている。このように工夫を凝らした幡足の仕様には豊かな装飾性が感じられるのは、天皇の齋会という国家儀式に於ける特殊な状況下で使用されたという特異性である。

平安時代になると、遺品は皆無に等しいが、長楽寺の平絹幡（図18）と、二次的資料ではあるが『平家納経』法師品見返し絵に描かれた幡などがみられる。これらの幡頭は一周忌齋会用幡とほとんど変わりはなく、幡身のほぼ正方形の坪形といい、縁を付けた幡足はまさに同工な仕様である。こうした幡頭や坪の形・幡足の仕立ては鎌倉時代に於いても兵主大社の刺繍三昧耶幡に踏襲されている（図19）。

2-5 船宿寺の由来と歴史

船宿寺は奈良県御所市の南部に位置し、今から1200有余前の神亀2年（725・奈良時代）に葛城村佐味の高宮寺の徳光禪師^{注4)}により、具足戒^{注5)}をさずけられた行基^{注6)}（668～749年・奈良時代の僧侶）が、この地に來られ薬師瑠璃光如来を祀ったのが始まりである。心身の病、苦悩を救う薬師如来を本尊に祀ったので、この寺の山号を医王山と呼んでいる。寺に伝わる古文書には、葛城の地において修行していた行基の夢の中に「船形の大きな岩があるから、その岩の上に薬師如来をお祀りするよう」とお告げがあり、夢から醒めた行基が、東の山の中に岩を見つけ、そこに御仏を祀り船宿寺と名づけたとの伝えが残されている。現在その岩場には巖舟明神^{注7)}と観世音菩薩^{注8)}が祀られ、新四国八十八番札所に指定されている。平安時代以降は弘法大師への信仰とその道場として今日に到っている。

2-6 船宿寺の堂内の荘厳具の幡

船宿寺の内陣には本尊の薬師瑠璃光如来の厨子と大壇がある（図20）。内陣の礼盤の天井には人天蓋が懸けられており、仏の上には仏天蓋が懸けられている（図21）。天蓋には阿闍梨を覆う人天蓋と諸尊を覆う仏天蓋と区別されている。内陣の天蓋の形は四角形で四隅に幡を三昧耶天蓋があり

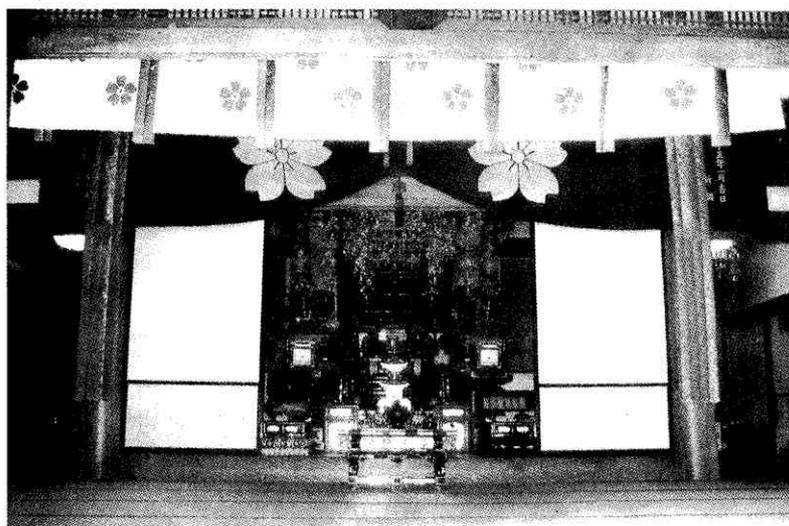


図20 船宿寺の堂内

これは幡（はた）と蓋（かさ）を組み合わせた幡蓋と言う荘厳具である。わが国の古典で

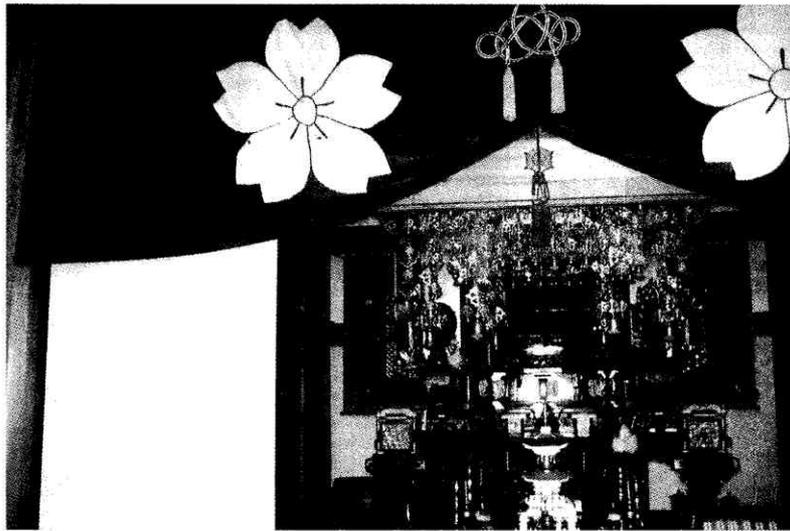


図21 天蓋

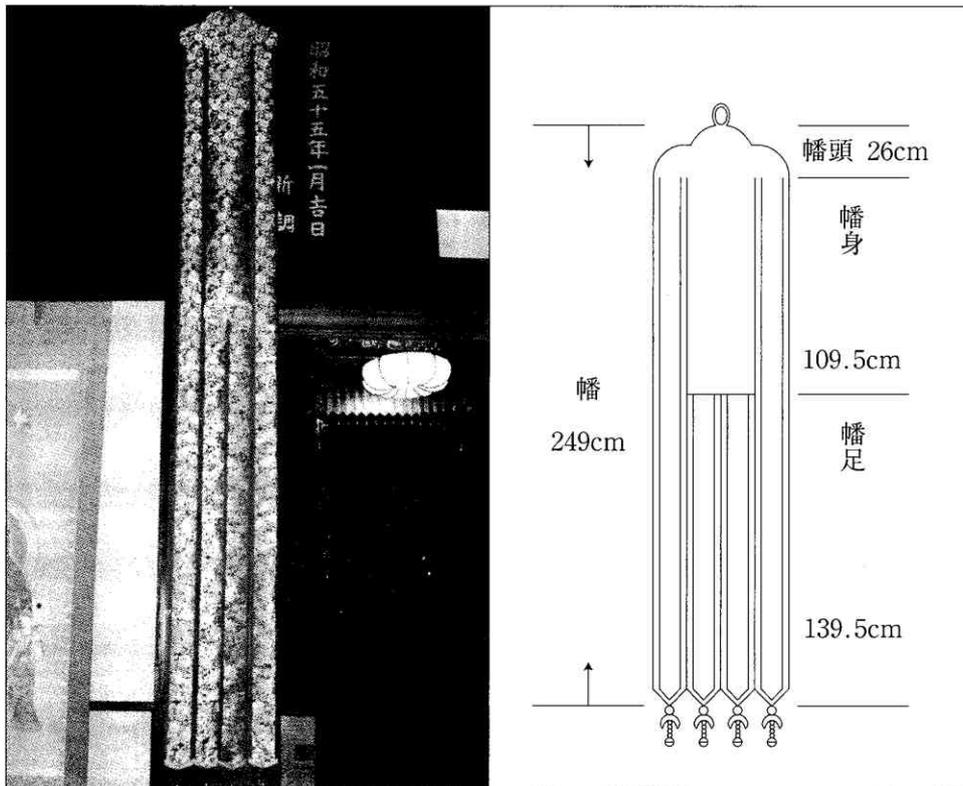


図22 唐幡

は「幡蓋」を熟語で使うことが多いが、天蓋と同義に使うことがある。天蓋には玉飾りをつけたり、美しい裂（綾や錦）を用いたり、蓮華を象ったりしたところから宝蓋・華蓋ともよばれた。仏典では宝蓋や光明が仏を荘厳する天蓋に化したことを説いている。

続いて、船宿寺の内陣の正面の左右の柱には唐幡の続命幡2対が懸け下げられている(図22)。幡の形状は幡頭、坪は長い一坪のままの幡身を持ち、その下に4条で長い帯状の

幡足が垂下っている。和幡の幡足は五条か七条の奇数であるが唐幡は偶数になっている。幡足の下端は金銅の脚端飾が付いており、先にはデザインした金銅製の鈴を飾って幾分装飾的になっている（図23）。これがアクセントのようで幡を引き立てているように思う。幡の長さは275cm、その内側2本の幡足は139.5cmで外側2本の盤足は249cmとなっている。幡足の幅は各8.5cmである。材質の表地は金襴で菊・桐唐草文様である。金襴は古くペルシア等で行われたものが中国で発達し室町時代に日本に渡来、桃山時代より江戸時代を経て現在に到るまで、京都西陣を出産地として織られている。金襴は高級織物で豪華絢爛さにおいてどの織り方よりも優れており、堂内の荘厳さを醸し出している。

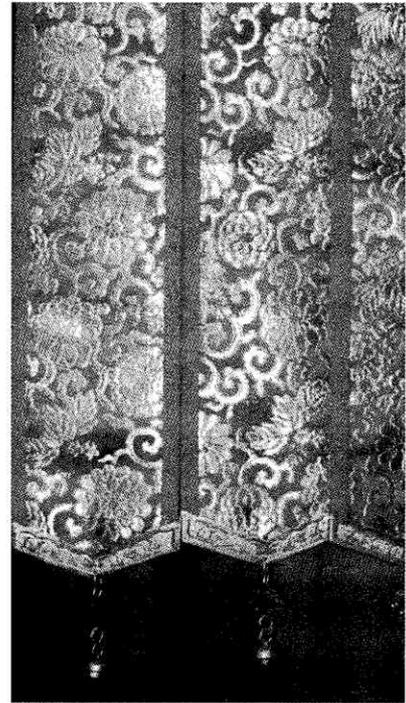


図23 鈴

ついで、本堂の右側の柱に命過幡2対が懸け下げられている（図24）。命過幡は死者の冥福を祈るというための幡で江戸時代には、若死にした子女の衣装（小袖）などを幡に仕立てて寺に収めて供養したと記録されている。この幡の表地は着物地で裏地は平絹で袷仕立てになっている。裏

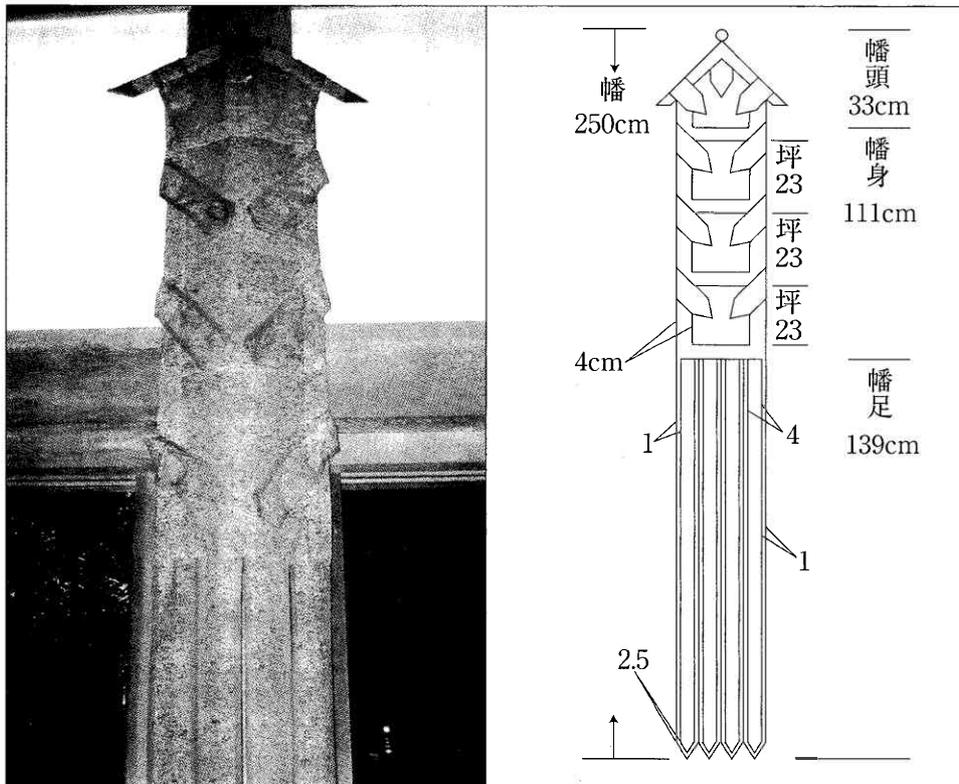


図24 命過幡

地には墨書があり明治41年に供養のため寄進されたと記されている。幡の形状については、幡頭部は三角形で、中央の帯紐は上方が吊緒になり、下方は舌となっている。下の頂より左右に帯紐状の幡頭手をつけられている。幡身の各坪は縦長で坪境によって各坪ごとに区切られている。縁は一条で一条縁の中には縁の各坪境より紐状の幡手が

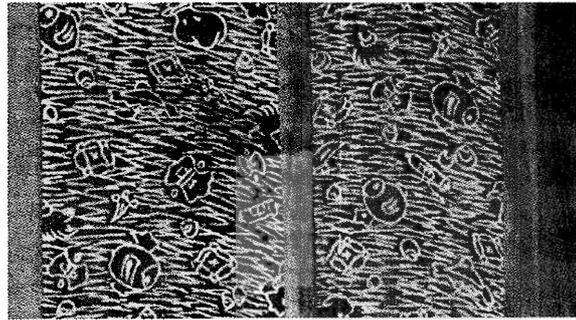


図25 宝尽くし

が重ね合わせ垂下げられている。幡足は長い带状で縁がつけられている。幡の長さは250cm、4本の幡足は139cmとなっている。絹織物の材質については絹地の着物で仕立てられている。きもの地の柄は宝尽し文である(図25)。宝尽し文は吉祥文様の一つで、中国で雑宝とよばれる珠、銭、磬(けい)、祥雲、方勝、犀角杯(さいかくのはい)、書、画、紅葉、艾葉(がいやく)、蕉葉(しょうよう)、鼎(てい)、靈芝(れいし)、元宝、錠などを散らした文様である。縁は朱色平絹で仕立てられている。本来ならば、幡の文様には仏事用として、たとえば羯磨・蓮華・種子などを主題としていたが、仏教的文様ではなく吉祥文様などめでたい文様に幸福や長寿を願って使われているように思う。

さらに、本堂の左側の柱にも命過幡2対が掛懸け下げられている(図26)。この幡の表地

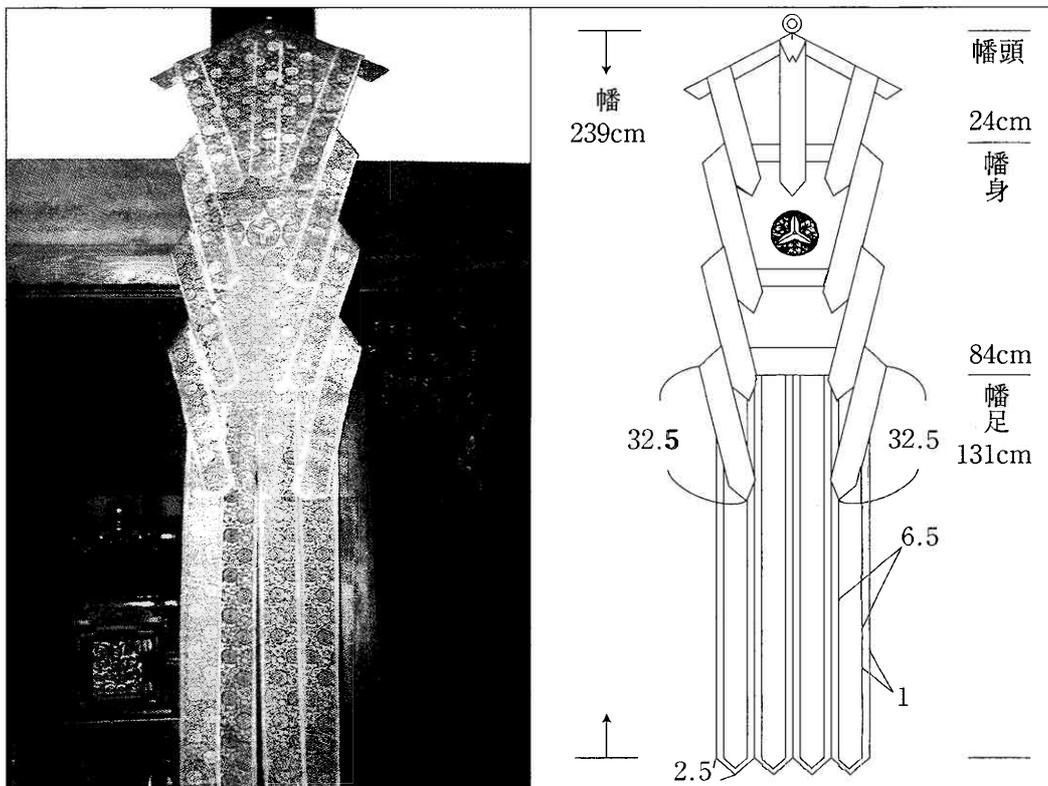


図26 命過幡

は錦で袷仕立てになって
いる。裏地には墨書が
あり、大正11年に供養の
ため寄進されたと記され
ている。幡の形状は前掲
幡とほぼ同様であるが、
顕著な相違点といえば、
第二坪に家紋の向こう花
沢瀉紋が刺繍されている
(図27)。沢瀉の紋の由来
の一つとして戦国時末期、
豊臣秀次が馬標に風流の

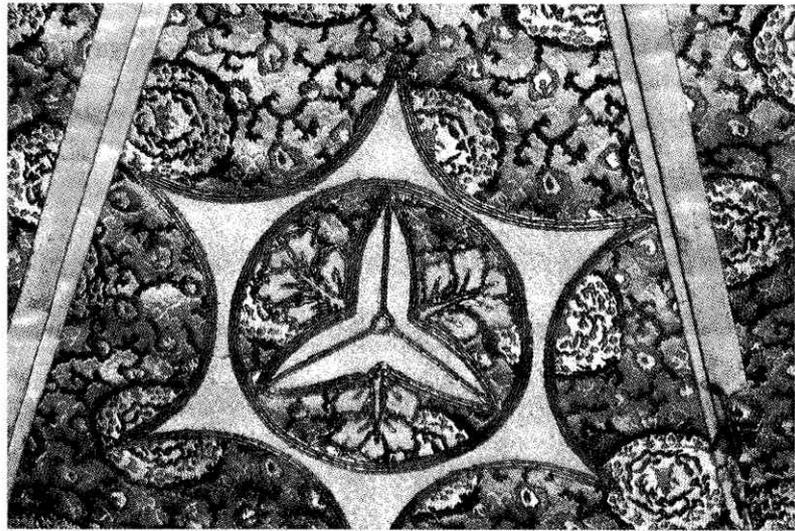


図27 向う花 沢瀉紋

武将毛利元就が渡河作戦の寸暇を割き、水田の湿地に生えている沢瀉にトンボのとまるを鑑賞後、合戦の結果勝利を博したのを記念して、沢瀉を家紋に採り入れたと言う説がある。また、紋には平安貴族の紋、武家の紋、そして江戸期に経済力を持った商家の紋とその歴史は、そのまま日本の文化の歴史でもある。したがって、紋に託して家の存続を願って命過幡に刺繍されたのであろうと考えられる。

命過幡については七世紀後半の幡が「戊子年七月十五日」銘のある命過幡、もうひとつは「智」泉法師命過云々の銘ある命過幡がある法隆寺献納宝物のなかにも壬午年銘、壬辰年銘、己未年銘、辛酉年銘、癸亥年銘など九首ばかりがあり、正倉院宝物のなかにも法隆寺の幡九首ばかりが混入しているように、尊師や高僧達の供養をするための命過幡であったようであるが、江戸時代（島原の乱の直後、1638年）の寺請け制度により、寺と檀家関係が浸透し、制度化されるようになり、檀家達が命過幡を仕立てて寺に納めるようになった。現在においても伝承されている。

2-7 橋本院縁起

養老2年（718年）高天山登拝の為この地を訪れた行基菩薩が霊地であることを感じ一精舎を建て一心に冥応を祈った。或る日のこと、念想中に容体より光を放ち香気漂う十一面観世音菩薩のお姿が現れこの霊応に深く感じさらに修行を続け、困難と苦悩に屈することなく祈念し続けた。人々はこの姿に高天上人と呼び尊敬した。元正天皇（715～724年）はこの功德を仰いで、又高天の霊地たるを知り、寺地として与え、十一面観音菩薩を刻むことを許された（開基）。以来参拝する人々が後を絶たぬ程盛大かつ繁栄を極めた。又天平17年（745年）には聖武天皇（724～749年）発病の折病氣平癒祈願をし、天皇より「宝宥山」の山号をいただくことになる。鑑真和上（753年来日）を住職に任命されるなど、

孝謙天皇（749～758年）も深く帰依され高天千坊と呼ばれ格式の高い大寺院で金剛転法輪寺七坊の1つとして石寺、朝原寺などと共に権威を誇った寺であった。又、葛城修験宗の根本道場として役の小角（634～701年）の修行した寺でもあった。しかし、元弘の変（1331年）以後、南朝についた高天寺の修験僧高天行秀らが陰から援助していたことから北朝方の畠山基国（1333年）高師直（1348年）らにことごとく焼き討ちされ、延宝5年（1677年）住職頼勇の手により高天寺の一子院橋本院として復興なるまで350年余衰亡の一途をたどっていた。

2-8 橋本院の堂内の^{しほこんく}莊嚴具の幡

密教寺院である船宿寺と橋本院におけるの堂内における幡は続命幡、命過幡などほぼ同様である。特筆すべき点として、橋本院は昭和30年代に住職坂井隆元氏によって建て替えられた。その時、高天千坊と呼ばれ格式の高い大寺院で金剛転法輪寺七坊の内に祀られていた普賢菩薩・涅槃像は室町時代の作と伝えられ、貴重なため奈良国立博物館に蔵されている。次いで、江戸時代に創建された方形造り（寄棟）の大師堂の内陣に懸けられていた天蓋の4連（図28）と続命幡の4対（図29）は新しく立て替えられた橋本院の本堂の両壁に懸けられた。大師堂の天蓋は四角形で美しい裂（綾や錦）を用いおり、一つの連の幅は59cmで丈は35cmとなっている。幡足の下端は金銅の脚端飾が付いており、先には鈴を飾っている（図30）。また、続命幡の形状については、幡頭部は三角形で、中央にデザインされた金銅製の金具が付けられ、下方は舌となっている（図31）。幡頭部の頂より左右に帯紐状の幡頭手をつけられている。幡身の各坪は縦長で坪境によって4坪に区切られている。幡身の各坪の縁にデザインされた金具がつけられている。縁は一条で一条縁の中央には縁

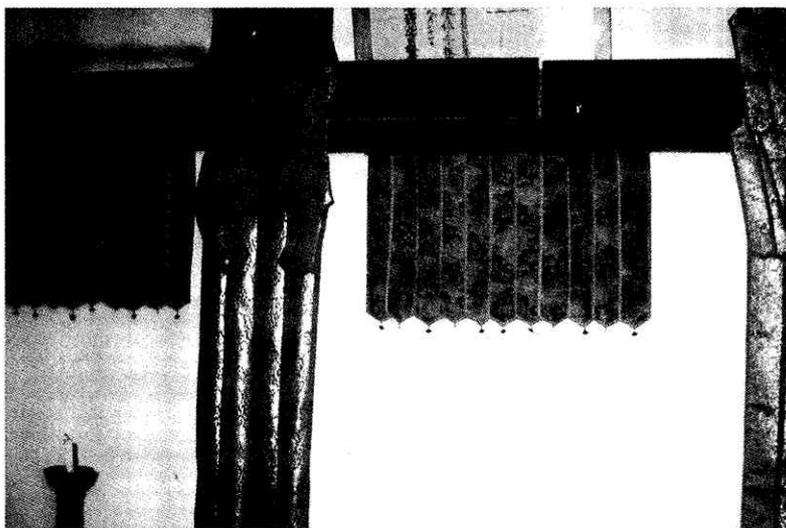


図28 天蓋の連

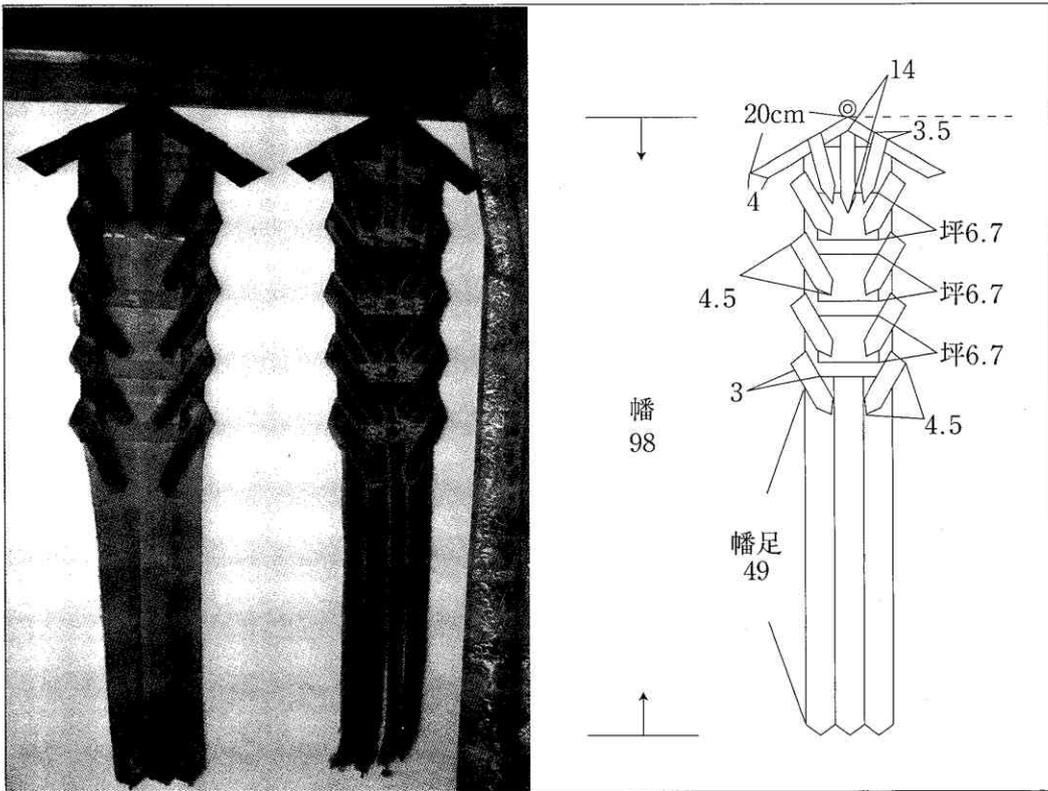


図29 小型の続命幡

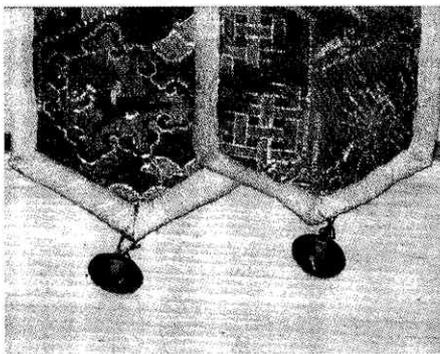


図30 天蓋の連の鈴



図31 続命幡の幡頭部の飾り

の各坪境より紐状の幡手が重ね合わせ垂下げられている。幡足は带状で縁がつけられている。幡の長さは98cm、4本の幡足は49cmであり小さめである（図29）。天蓋の連や幡の寸法は大師堂の天井の高さによるものである。天蓋と続命幡の材質は同じ裂を使用している。表地は金襴で松・丸に花・唐草文様で吉祥柄である。したがって、古い仏像や古い幡は大切に伝えられていることが伺えられる。仏教は三宝（仏・法・僧）によって成り立っている。「仏」は仏像・仏画を重視され、「法」は經典によっている。幡や蓋はこの「仏と法」

の存在を象徴し、これらを供養することを意味する。「幡と蓋」は「仏と法」との供養と莊嚴に欠くことのできないものである。「僧」は仏教を信奉することによって国の発展と繁栄とが得られると説かれている。仏教にとって幡の役割は欠くことの出来ない莊嚴具として意義深い結果が得られた。

まとめ

幡というものは、古代インドでは「パターカー」と称され、覚りを開いた者や勝者のしるしとされたもので、転じてこれが降魔のしるしともなったという。やがて「幡」を作ることによって功德が得られ、また寿命の延長までも得られるといい、現世の利益が説かれたのがはじまりである。日本への幡の伝来は日本古来の勅撰書である日本書紀によると、百済の聖明王より幡蓋がもたらされたのが最初とされている。幡蓋は幡（梵語のpataka^{パターカー}）と蓋（cha-tra）の二具を指すが、密教では四角形の天蓋の四隅に幡を垂らす三昧耶天蓋がありこれは幡（はた）と蓋（かさ）を組み合わせた幡蓋と言う莊嚴具である。わが国の古典では「幡蓋」を熟語で使用するが多いが、天蓋と具である。わが国の古典では「幡蓋」を熟語で使用するが多いが、天蓋と同義に使用することがある。天蓋には阿闍梨を覆う人天蓋と諸尊を覆う仏天蓋と区別されている。天蓋には玉飾りをつけたり、美しい裂（綾や錦）を用いたり、蓮華を象ったりしたところから宝蓋・華蓋ともよばれた。仏典では宝蓋や光明が仏を莊嚴する天蓋に化したことを説いている。幡には長命を願う続命幡、死者の冥福を祈る命過幡など追善供養として作られた。幡の形制は舌をそろえた三角形の幡頭とふつう数坪に区切られた長方形の幡身をもち、側面には幡手、下端に幡足をつけるのが基本であり、あたかも人形（ひとがた）を凝して作られたかのようにもみえる。和幡の幡足はおおむね五条か七条の奇数になるものが大部分であるが、唐幡は偶数となっている。日本の文化は奇数文化の志向となっており、幡足においても同一傾向が見られる。

材質は金襴・錦・綾・平絹などの裂地製や刺繍のものが大部分であったが、地に金銅版に透彫・線彫を施した金銅幡などがある。金襴は古くペルシア等で行われたものが中国で発達し室町時代に日本に渡来、桃山時代より江戸時代を経て現在に至るまで、京都西陣を主産地として織りだされている。明治より大正にかけての本金による金襴の優品が多く残っている。よって、堂内の幡は圧倒的に多く金襴で仕立てられていることが伺える。幡の文様には仏事用として、たとえば羯磨・蓮華・種子などを主題としていたのが本来であるが、仏教的でない文様たとえば吉祥文様などめでたい文様に幸福や長寿を願って使われているように思う。

命過幡については七世紀後半の幡が「戊子年七月十五日」銘のある命過幡、正倉院宝物のなかにも法隆寺の幡九首ばかり命過幡が混入しているように、尊師や高僧達の供養をす

るための命過幡であったようであるが、江戸時代（島原の乱の直後、1638年）の寺請け制度により、寺と檀家関係が浸透し、制度化されるようになり、檀家達や若死にした子女の衣装（小袖）など幡に仕立てて寺に納めて供養した。現在においても伝承されている。

仏教はもとより三宝、つまり仏・法・僧によって成り立っている。今は「仏」は仏像・仏画、「法」は経典によっている。幡や蓋はこの「仏と法」の存在を象徴し、これでもってこれらを供養することを意味する。「幡と蓋」は「仏と法」との供養と荘厳に欠くことのできないものである。「僧」は仏教を信奉することによって国の発展と繁栄とが得られると説かれている。仏教にとって幡の役割は欠くことの出来ない荘厳具として意義深い結果が得られた。

謝辞

本研究を行うに当たり、貴重な資料を御提供くださり、種々の御助言をたまわりました船宿寺の住職菅原正光氏に謹んで御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 伊藤幸作：日本の紋章、ダヴィッド社、(1965)。
- 2) 上野明雄：日本書紀②巻第11仁徳天皇～巻第22推古天皇、小学館、(1996)。
- 3) 上野明雄：日本書紀③巻第11仁徳天皇～巻第23舒明天皇、小学館、(1996)。
- 4) 大島建彦：日本の神仏の辞典、株式会社大修館書店、(2001)。
- 5) 沢田むつ代：日本の美術 4（題263号）染織（原始・古代）、至文堂、(1988)。
- 6) 鈴木敬三：有機故実大辞典、KK古川博文館、(1996)。
- 7) 青海邦子：船宿寺における花供養法要と柴燈護摩供養の僧服について、大手前女子短期大学大手前栄養文化学院、大手前ビジネス学院、研究録、(1990)。
- 8) 千鹿野茂：都道府県別姓氏家紋大辞典 西日本編、柏書房株式会社、(2004)。
- 9) 中村元：図説佛教語大辞典、東京書籍株式、(1988)。
- 10) 長沼静：染色標本集 下、日本和装教育教会、(1985)。
- 11) 林英男：日本仏教史辞典、株式会社古川弘文館、(1999)。
- 12) 松本包夫：日本の美術10（293）正倉院の錦、(1990)。
- 13) 光森正士：正倉院宝物にみる仏具・儀式具、紫紅舎、(1993)。
- 14) 奈良国立博物館：第58回「正倉院展」目録、(2006)。

資料

注1) 『日本書紀』注釈書（著者による現代語訳）

冬10月に百済の聖明王は（またの名は聖王）西部姫氏達率怒喇斯致契らを派遣して、釋迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干を献上した。

注2) 31年秋7月新羅は、大使奈末智洗爾を派遣し、任那は達率奈末智を派遣して、ともに来朝した。そうして仏像一具と金塔、それに舍利と大観頂幡一具・小幡12条を合わせて貢上した。そこで仏像は葛野の秦寺に安置し、ほかの舍利・金塔・大観頂幡などはみな四天王寺に納めた。

注3) 壬戌（9日）に、出雲国司に詔して、嵐に遭遇した蕃国の人を上京させた。この日に越の蝦夷の僧道信に、仏像一軀、灌頂幡・鐘・鉢各一口など献上された。

注4) 徳光禪師 奈良県南葛城郡史

- 注5) 具足戒 サンスクリットの〈ウパンサンパダー〉upasampadaの漢訳。仏教の出家教団（僧伽）に入るときの試験をいう。原則としてだれでも僧（比丘（びく））になることが許されるが、しかしつぎの場所に限って入団許可は得られない。たとえば20歳に満たない者、父母の許しを得ない者、負債のある者等、20種ほどの場合がある。
- 注6) 薬師瑠璃光如来 東方に創造される極楽世界である浄瑠璃世界の教主である仏。万病を治癒し人の寿命を延ばすことを本願とする仏として信仰されている。
- 注7) 巖船明神 その土地の守神でおそらく自然崇拜の中での山の神として起こって来た。
- 注8) 観世音菩薩 梵語アヴォロキテシュヴァラAvalokitesvaraの漢訳。世に光を与える名（音）の持主を意味する光世音、なやめる衆生（世）をみそなわす人を意味する観世音、いずれも菩薩の慈悲を代表する名である。

キーワード：幡 荘嚴具 船宿寺 橋本院

Keywords : Ban, sacred Adornment, Sensyukuji Temple, Hashimoto Temple